

”漢字の読み”家庭環境により学力差

小学生に漢字の読みのテストをした。1年生3学期で「草」という漢字を91%が読める。しかし「弟」を読める1年生は9%だけで2年生になって91%が読めるようになる。「草」は1年生で教えるが「弟」は2年生にならないと教科書に出てこないからである。

当たり前の結果だといわれるかもしれないが、私は感銘を受けた。学校の機能不全が至るところで四六時中叫ばれている。にもかかわらず、学校で教えれば漢字を読めるようになり、教えなければ読めない。学校の教育は偉大だ。

ところがその偉大さは高学年になるに従ってかげりを見せる。「乱れる」は6年生で教えられる。しかしこれを読める6年生は79%にとどまり、2割は読めない。逆に5年生でも読めるものが43%いる。

なぜ学校で教えれば読めるようになるという法則が乱れるのか。「教わっていても読めない」6年生は、相対的に低学歴家庭の子に多い。逆に「学校で教わってなくても読める」5年生は高学歴家庭の子が多い。母親が大卒か短大の子で「乱れる」が読めたのは58%、そうでない子は33%だった。

学力の獲得機会は多様でよい。問題は特定の家庭背景を持つ子供が学力の獲得過程で不利な環境におかれている可能性だ。子ども自身の努力が及ばない事情による学力差が社会が対応すべきである。(お茶の水女子大学教授 耳塚寛明)

(2004年 9月11日 日経新聞より抜粋)

子供が勉強する上で家庭環境というものは非常に大切です。これはただ単に親の学力のことだけを言っているわけではありません。日ごろから親の喧嘩が絶えない家庭で勉強ができるようになるでしょうか。私はそうは思いません。子供は親の背中を見て育つと言います。子供に「勉強しなさい」とだけ言って後はほったらかし、ではなく自分は親として何ができるのか、ということを常に考えてあげてください。子供も時には悩み勉強が手につかなくなることもあるかもしれません。そんな時はやさしく相談に乗ってあげてください。そうして親ともども成長していくのではないのでしょうか。

時には勉強だけではなく鉛筆を置いて親子でいろいろ話し合ってみるのもいいかもしれませんね。

2004年保護者11月